

# 家庭教育をめぐる意識のズレ

— 親・教師・専門家の比較 —

森 楸 樹 (広島大学)      ○植田ひとみ (高知女子大保育短大部)  
○西田忠男 (比治山女子短大)      湯川秀樹 (広島大学大学院)

## I 目 的

本研究の目的は、小学校中学年の子を持つ親、小学校の教師、公民館職員および家庭教育学級などの講師（大学教員等）の三者相互間の家庭教育意識を比較し、それぞれの意識の実態と差異を明らかにすることにある。

実際に子育てをしている親の意識と、学校の教師あるいは専門家の意識との間には、はっきりとした違いがあると予想される。なぜなら、前者は現実的な意識を持ち、後者はどちらかといえば理想的客観的意識を持つと考えられるからである。また、直接子どもの教育に携わっている教師と専門家との間にも、同様に意識の違いがあると思われる。

さらに、本研究では、子どもの教育に対する意識だけでなく、家庭教育全般についての一般的な意識、家庭教育における祖父母の存在の意味、さらには社会教育の一環としての家庭教育学級のあり方などについても考察する。

## II 方 法

### (1) 調査の対象

- ① 広島市内の小学校中学年の子どもの親 313名（母親273名 父親40名）
- ② 広島市内の小学校中学年を担当する教師110名
- ③ 広島市内の公民館等の社会教育施設の職員114名
- ④ 広島市内の公民館等の実施する家庭教育学級等の講師（主として大学教員）63名  
なお、分析の際には、③職員および④講師を「専門家」とした。

### (2) 調査の方法

調査は、強制選択法による質問紙法により実施した。質問紙を、学校や公民館等の社会教育施設を通じて被調査者に配布する方法をとった。回収率は、ほぼ100%であった。ただし、対象が講師の調査については、郵送法を用いた。この場合の回収率は82%であった。

調査票の配布及び回収は、親に対しては昭和59年12月に行い、その他の対象に対しては昭和60年1月から2月に実施した。

### (3) 調査票の内容

#### ① 親を対象とする調査票

全部で53の項目から成り、内容は次の5つの領域に大別することができる。

- 1) 回答者（親）の属性 [Q1-Q7]、2) 回答者の子どもの属性 [Q8-Q11]、3) 家庭教育の実態と家庭教育観 [Q12-Q35]、4) 家庭教育学級等への参加度 [Q36-Q41]、5) 家庭教育学級等の運営についての意見 [Q42-Q53]。

#### ② 教師を対象とする調査票

質問項目は22あり、その内容は次の3領域に大別できる。1) 回答者の属性 [Q1-Q5]、2) 家庭教育観 [Q6-Q18]、3) 公民館等の活動方法等に関する意見 [Q19-Q22]。

#### ③ 職員を対象とする調査票

質問は、選択肢の設けられた項目27、および自由記述の項目5から成っている。前者は内容の面で次の3領域に大別される。1) 回答者の属性 [Q1-Q3]、2) 家庭教育観 [Q4-Q14]、3) 公民館等の活動方法等に関する意見 [Q15-Q27]。

## ④ 講師を対象とする調査票

質問項目は20ある。内容は、回答者の年齢と公民館等での講師としての経験を尋ねるもの[Q1-Q2]が2つ、家庭教育観に関するもの4項目[Q3-Q6]、それ以外は家庭教育学級の進め方についての意見を尋ねたもの[Q7-Q20]である。

以上、いずれも用意された回答選択肢から1つまたは2つを強制選択させる回答方式である。また、家庭教育学級等についての意見や希望等を自由に記述するよう求めている。

## (4) 共通質問項目

- ① 親の子どもに対する期待
- ② 親の学校に対する期待
- ③ 親が家庭教育で力を入れていること
- ④ 家庭教育観(3項目)
- ⑤ 親の気がかりなこと
- ⑥ 祖父母との同居
- ⑦ 家庭教育の学習内容

## (5) 分析の観点

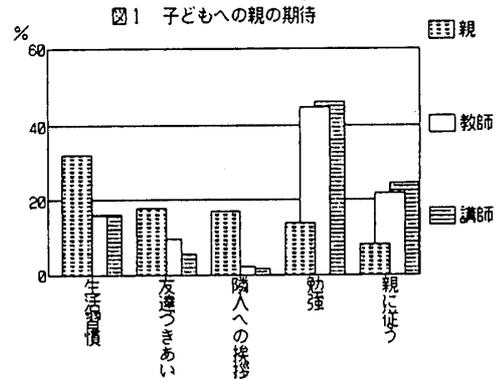
親・教師、専門家に共通の質問ならびに関連質問から以下の項目をとりあげ、3者間の相違を検討する。

- ① 親の子どもへの期待
- ② 親の学校への期待
- ③ 親自身の役割
- ④ 家庭教育についての学習
- ⑤ 家庭教育に対する評価  
— 厳しさ・干渉度・教育方針
- ⑥ 家庭教育における親の悩み
- ⑦ 家庭教育における祖父母の位置づけ
- ⑧ 家庭教育学級のあり方

## III 結果と考察

## (1) 子どもへの親の期待

(図1参照)



## (2) 家庭教育と学校教育の守備範囲

## 親自身の意識

親が子どもに対して望んでいることは、まず、「身のまわりのことを自分でしてほしい」ということである。比率はかなり下がるが、「友達つきあい」「近所つきあい」がそれに続き、さらに低い比率で「勉強してほしい」があがっている。すなわち、親が子どもに望む第一のことは、日常生活習慣の自立であり、それができた上で、まわりの人との円滑な人間関係を形成してほしいと願っている。勉強してほしいという願いも確かにあるが、それは決して主たるものではない(図1参照)。

そういった子どもへの願いに伴って、親として、家庭では、第一に「日常生活上のしつけ」に力を入れ、第二に「からだを鍛えること」を心がけ、第三に「遊び友だちを大事にする」よう働きかけている(図2参照)。しかも、それらを実現するために、家庭教育学級などで、「基本的な生活習慣」や「親子関係」について学習したいと考えてもいる(図3参照)。

一方、学校に対して親が期待していることは、第一に「集団生活での規律を守る訓練をしてほしい」ということであり、その後、「学力をつけてほしい」が続くが、比率的には前者の約半数である(図4参照)。

以上のことから、子どもの教育に関して、親は、家庭および学校の特性を認識して、家庭で引き受けるにふさわしい領域を担おうとし、学校でこそ有効に行われるものは学校へ任せようとする考えが表面上はみられる。一応、親は、家庭教育と学校教育の守備範囲を認識し、役割分担を考えているといえよう。

図2 家庭教育の力点

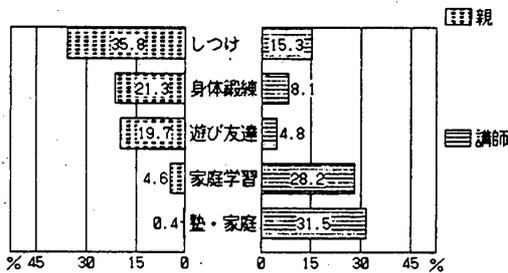


図3 家庭教育の学習内容

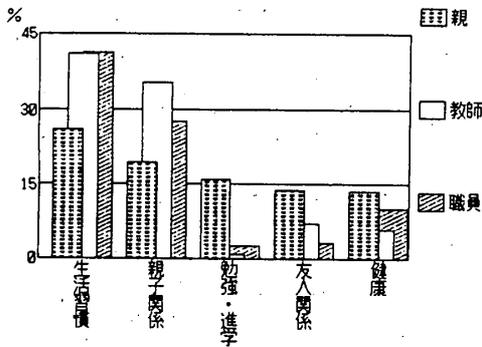
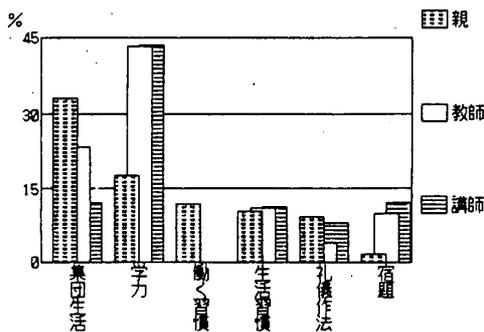


図4 学校への親の期待



親についての教師・専門家の見方

では、教師や専門家は親をどうみているだろうか。

まず、講師は、親がわが子に望んでいるのは「勉強して欲しい」ということであるとみている。そのため、家庭教育で力をいれているのは、学校教育では十分でないので塾や家庭教師に頼んで勉強させていることだとみており、日常のしつけはあまりしていないとみている（図1・2参照）。

つぎに、教師と職員についてみると、親が子どもに対して望むことは、何よりも「勉強してほしい」ということであるとみている者が、半数近くいる。それに続いて、「親のいうことを素直に聞いてほしい」と願っているとみており、「身のまわりのことを自分でしてほしい」（親の望みの第一位）と願っている親は少ないとみている。教師や職員は、親たちの家庭教育意識に対してかなり厳しい見方をしている。すなわち、親は、子ども自身の成長発達を願うというよりも、むしろ親自身の欲求を子どもに押しつけていると職員はみているようである（図1参照）。

では、教師や職員は家庭教育に何を望んでいるだろうか。第一に、子どもの真の成長発達の援助者であることを願っており、家庭では「日常生活のしつけ」に力を入れ、「家事を手伝わせる」べきだと考えている。これは、意識の上では親と合致するが、教師や職員は、現実にはそうでないとみているため、そうあるべきだと望んでいるととれよう。また、そのために親には「基本的な生活習慣」や「親子関係」を学習してもらいたいと思っている（図3参照）。

さらに、親は、学校に対しても第一に「学力をつけてくれること」を期待していると、教師や講師の半数近くの者がみている。「集団生活での規律を守る訓練」を期待しているとみてい

る者も教師には2割強いるが、講師になるとその比率はもっと低くなる(図4参照)。

以上のことから、親の子どもに対する願いや家庭教育と学校教育の役割分担についての意識は、どうやらタテマエであり、現実には子どもをヌキにした親中心の考えが家庭教育の実際を強く支配しているようである。

### (3) 家庭教育に対する評価

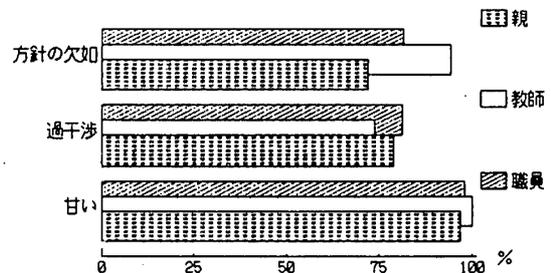
親は、わが国の家庭教育を一般的にどうみているだろうか。図5から、甘く、干渉しすぎる傾向にあり、しかもきちんとした教育方針を持った家庭は少ないとみている。

この点についても、職員の評価は厳しい。親は子どもに対して、非常に甘く、非常に干渉しすぎ、きちんとした教育方針をもたないとみている者が、親よりはるかに多い。

教師の評価は、職員とは異なる。親は子どもに対して非常に甘く、しつけの方針をもった家庭は少ないと思っているが、干渉については職員だけではなく親よりも、干渉しているとみている者は少ない。特徴的なのは、親はもっと干渉してもよいと考える者が、三者の中では一番多くみられることである。

これらのことから、親は、子どもに「日常生活習慣の自立」や「まわりの人との円滑な人間関係の形成」を望むといいつつ、それに必要なしつけをきちんとしておらず、また過度に手出し口出しして、子どもの自立を妨げていると教師や職員はみている。教師が、親にもっと干渉してもよいと考えているのは、結局、家庭でしつけるべきことがしつけられていないことに不満を抱いているためと思われる。親が本当に子どもに何を願っているのか、どんな子どもに育てほしいと考えているのか、教師を初めとして多くの人が感じる疑問であろう。

図5 家庭教育に対する評価



### (4) 家庭教育における親の悩み

親がわが子のことで一番気にかかっていることは、「勉強・進学問題」である。子どもの日常生活習慣の自立や円滑な人間関係の形成を願っていると回答したものが多くにも関わらず、「しつけ」や「友達関係」を気にかけている親は少ない。ここに、親のホンネとタテマエのズレが見てとれよう。教師や職員がみているように、頭の中が子どもの勉強もことごとくいっばいになっている親が多いといえよう。

### (5) 家庭教育における祖父母の位置づけ

祖父母と同居する方が子どものためになると考えている親が約8割おり、教師や職員ではその比率はさらに高くなる。

また、親は子どもと祖父母を積極的に交流させたいとも考えている。しかし、悩みの相談相手として祖父母を求める親は少ない。

これらのことから、親は、家庭教育の重要な担い手として祖父母を位置づけているわけではなく、子どもの世話をしてくれる人として位置づけているように思われる。